地域研究　Vol.50　No. 2　pp. 1～8
2010－3　　ISSN 0389-6641

沼津・三島地域の地域論－動的地誌への一試論－*

大　塚　昌　利**

Ⅰ　はじめに

近年，とはいってもかなり前からであるが，地理学界の機関誌に以前ほどの関心が湧かなくなっている．その最大の理由は，系統地理学的研究が大勢を占めているからではないかと考えている．というよりも，地誌学的な論文が少なすぎるといったほうがよいのかもしれない．もちろん研究は「その道」を深く追究していくことが重要であるし，若い研究者は先人が研究してきた分野や研究対象とは異なる，新しい分野，新しい対象を見つけながらそれを深めていかなければならないから，どうしても系統地理学的研究になってしまうのも致し方ないことではある．

地誌学研究の幅をやや広げて，地域論的な研究を含めてみても，その偏重が大きく緩和されるまでには至っていない．地誌学研究がほとんどみられない理由の一つに，地誌学は科学ではないという考えは別にしても，百科事典的または羅列的記述に終わっているという以前からの指摘が，現在においてもあまり変わっていないという点である．一方，そうした批判に対して，動的地誌学（動態地誌学とも）でなければならないと唱えたのが，シュペートマン（H. Spethmann）であった．それが1929年であったから，すでに80年を経ていることになる．しかしながら，その後動的地誌学研究が飛躍的に増加したわけでもない．

その理由の一つは，動的地誌をどのように記述したらよいのかが明確になっていないからであると考えてよいであろう．シュペートマンの「その地域における現在の性格を把握して，それを中心として記述を進めなければならない．少なくとも重要な要素を真っ先に取り上げ，その後，次第に他の要素に入るべきである」（日本地誌研究所，1989）というのに対して，取り上げられない事象，捨てられてしまう事象がでてくるという批判は以前からあった．また，そのような方法では恣意的になってしまうという危惧があり，客観性に欠けるという指摘もみられた．その結果，十人十色の地誌学ができあがってしまい，科学性に欠けるという批判である．一方でそれでもよいとする見解もある．

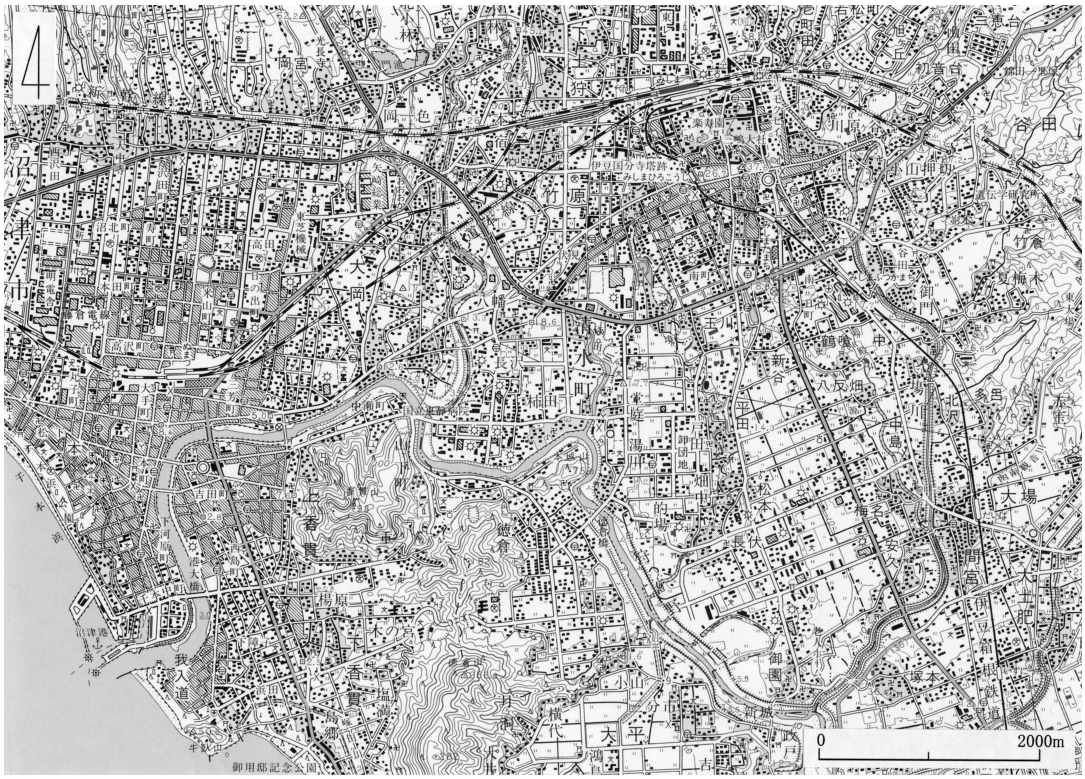
このような動的地誌学と静的地誌学（静態地誌学とも）の比較，それぞれの長所と短所，従来の批評，動的地誌のあり方等についてはすでに指摘されており，従来とは異なる方法の必要性も提示されている（木内・西川，1967；谷岡・斎藤，1984；長谷川，1994；竹内，2009）．さらに，「本質的に重要なこととしては，動的地誌の長所を生かした科学的地誌学の体系を，いかに樹立するかという基本的な問題がある」（日本地誌研究所，1967）という指摘や，「（前略）地誌学の課題は，なによりも先にまずそうした各要素の間の因果関係の本質を見きわめることでなければならない．個々の要素の間の相関関係を分析的にとり上げることも重要だが，もっと大切なことは，それらの相互関係を総合して，地域の全体としての構成を明らかにし（後略）」（木内・西川，1967）とも指摘されている．

こうした議論が行われながら，しかし動的地誌が多く記されることはなかった．地誌学が地理学の中で重要な地位を占めると考える以上，動的地誌の具体的な

［キーワード］1　動的地誌　2　地域構造　3　沼津・三島地域

* 本稿は，2009年度立正地理学会において講演したものに，補筆修正したものである．

** 立正大学地球環境科学部



第１図　沼津・三島地域の中心部
（国土地理院　５万分の１地形図「沼津」約70%縮小　平成９年８月発行）

記述とその蓄積が求められる．最初から完成された成果を提示しなくても，試行錯誤の過程を経て，あるいは批判を通して動的地誌を確立することが求められるのではなかろうか．本稿は，以下において静岡県沼津市・三島市と両市に挟まれた長泉町の一部および清水町を対象（以下，沼津・三島地域とし，中心部を第１図に示す）に，動的地誌の一試論を展開してみようとするものである．

Ⅱ　動的地誌の先行事例

動的地誌の一例として，田中啓爾の著作である『東京都新誌』（田中，1949）をとりあげてみる．その理由は，日本では数少ない動的地誌の好例であると思うからである．その構成（目次）をみると以下のようになっている．

郷土新書刊行の趣意
はしがき
第一章　日本の首府－政治の中心地－
　１．日本の政治の中心地
　２．東京都とは
　３．宮城のある所
　４．各省と議事堂
　５．大使館区
　６．都庁と区役所
第二章　日本の経済の中心地
　１．経済上の中心地

2．ビル街（丸之内地区と日本橋地区）
3．問屋街
4．取引所
第三章　日本の交通の中心地
第四章　日本の工業の中心地
第五章　日本の文化の中心地
第六章　東京の住宅地
第七章　東京の水
第八章　東京の商店街
第九章　東京の娯楽地
第十章　東京都内の交通
第十一章　東京の郊村（周縁部）
第十二章　武蔵野の開拓（外縁部）
第十三章　衛星都市と山麓都市
第十四章　関東山地と山村
第十五章　東京の南の島々
第十六章　東京の人口
第十七章　むすび－地理区
統計
東京都地誌，絵画，地図文献目録
あとがき

目次の全てを示すと長くなるので，第一・第二章のみ節まで示し，第三章以下は章のタイトルのみとしたが，目次だけをみても静的地誌の記述方法とは異なることが明らかである．多くの静的地誌にみられる，地質，地形，気候，人口，産業と続く方法とは明らかに違いがあり，前述したシュペートマンのいうところと一致している．

この『東京都新誌』は，ただしどのような基準で各章節を組み立て，どのような順序で記述に及んだかについては直接述べられていない．しかし，あとがき－著者のめざすところ－で「（前略）一つでも出てきた事がらは必ずそこになっとくする理論がなければならない．それにはもっとも典型的な事がらをとりあげて，理論的に調べることに徹底する必要がある．そのためには必ずしも多くの事がらをむさぼってはならない．（中略）又今の社会のすがたをほんとうに知るにはこれがどう発達して来て，おのおののありさまがどの程度の段階にあるかを知ることが，理論からいっても，将来の発達を予想する上からいっても必要である．（後略）」としている．従って，記述されている順序に著者の思考は充分反映されているとみてよいであろう．なお，シュペートマンの動的地誌と田中の地誌学，および両者の類似性等については，田村(1984）によって詳細な考察が行われている．

日本地誌研究所が1967年から1980年代半ばにかけて逐次刊行した『日本地誌』では，各都道府県の総説については同じ項目が同じ順序で記述される静的地誌の方式をとりながら，内域誌ではそれぞれの地域の特徴的な性格から順次記述されており，動的地誌の構成，記述となっている．比較的近年のものでは『川崎の地誌』（小川，2003）も静的地誌とは異なる記述方法となっており，『日本の地誌』（立正大学地理学教室，2007）は各地域について諸地域の性格は共通させながらも，各地域の特性を取り上げた構成になっている．

しかし，前述したように従来型の地誌である静的地誌に比べて，動的地誌の必要性ないしは地誌は動的地誌でなければならないと指摘される割には，その成果は極めて少ないといってよいであろう．また，従来の地誌書は書籍であることが多く，かなり広い地域を対象に記述されたものが一般的である．地理教育のことも考えると，そこまで大部なものではなく，論文的な形式での地誌ないしは比較的狭い地域の地誌をどのように記述するかということも考える必要があろう．長谷川(1994）による『地誌学研究－地誌作成法とその実例－』には，学生による地誌作成の成果例が収められている．

Ⅲ　動的地誌の実験
－沼津・三島地域を事例として－

1．事例地域としての沼津・三島地域

地誌を作成するにあたって，地域を構成している地理的事象を網羅するのは理想ではあるものの，それは不可能に近いしその必要もないであろう．かといって作成者の意図のままに組み立てられても，客観性に乏しいという誹りは免れない．そこで，ある程度の客観性が必要になってくる．それを実験的に示してみようというのが，本稿の主旨である．

沼津・三島地域を対象としたのは，学生との巡検で長年フィールドとしてきたことによるが，地形の多様性や歴史的背景の豊富さ，人文的事象の多さとそれらが変化に富んでいることからフィールドとしたものである．また，国土地理院が2.5万分の１土地利用図を作成するにあたって，試作版が作られた地域であったことを考えると，各種の地理的事象が集積している場所として選ばれたものであろうと考えられる．その意味では好適な場所であるといえよう．

2．地誌的記述のための具体例

巡検の終了にあたって，学生に提示したのが後出の第２図である．同じ性格の地理的事象を細い線で囲んだものが最も低いレベルの項目で，そこから得られる性格を〈　〉で示している．次にそれらが複数集まって《　》で示される性格となり，それはやや太めの線で囲まれた次の階層になる．さらにそれらが複数集まってより上位の階層となり，【　】で表される．太い線で囲まれた部分がそれである．以下にその事例を示す．なお，図中ではスペースの関係上，用語の一部を省略しており，以下の記述とは異なる場合がある．

⑴　富水性地域

柿田川は富士山の降雪が地下水となって湧出したものであり，小松宮彰仁親王の別邸であった楽寿園内の小浜池や，丸池などをはじめとして湧水からなる多くの池がある．これらのことから，地下水が豊富な場所として位置づけることができ，〈湧水群〉として性格づけることができる．なお，同じ性格の地理的事象，例えば湧水が３か所以上あれば，それらはその地域において偶然ではなく，何らかの地理的な意味をもつものと考えた．これは田中啓爾が巡検の折などによく話した言葉である．

次に，丹那牛乳，不二家，森永製菓などの工場がこの地域を特色づけている．沼津市にあった不二家は隣接市に移転したが乳製品工場の発祥の地であり，森永製菓三島工場の最初の製品も乳製品であった．かつては雪印乳業，日清製菓の工場もあった．一方，丹那盆地は日本の酪農のさきがけともなった地域の一つである．三島市の郊外は畜舎飼いではあるがその影響を受けており，愛鷹山麓地域とともにここに〈酪農地域〉が成立している．この酪農業と上記の工場とから，《乳製品工業の立地》という性格付けが可能になる．また，乳製品工場に限らず三島駅の北には東レが進出しており，かつては大量に水を使用する東京麻糸工場もあった．上述の乳製品工場も含めて，〈地下水が豊富で，用水指向型工業が立地する場所〉という性格づけができる．さらに，工場だけでなく先の楽寿園をはじめ，菰池などの親水公園や養魚池があり，飲める雪解け水を目玉に茶室にコーヒー館，土産物販売を併設した泉の館も立地している．ここには観光バスも訪れるようになった．〈湧水が観光資源〉になったといってよい．以上の諸現象とそれらが意味する湧水群や乳製品工場，用水型工業の進出などから，沼津・三島地域を【富水性の地域】として位置づけることが可能になる．

⑵　駿東地域の工業化

用水型工業に加え，第二次大戦時にこの地域には中島飛行機，電業社，明治ゴム（現横浜ゴム）などの工場が疎開して〈軍需工業化〉が進むとともに，〈京浜工業地帯からの工場進出〉がみられた．戦後はそれらが平和産業へと転換し，高度経済成長期における工場

の進出，下請企業の集積，その後の工業団地の造成などによって，《駿東地域の工業化》が進んだ．一方，近年工場の閉鎖や縮小が増え，〈工場跡地の再開発〉により大型商業施設などへの転換がみられるようになった．

⑶　伊豆観光の一拠点

ハマユウが自生しているのをみれば，ここが〈温暖な地〉であるということができるし，古くは沼津御用邸（現在は御用邸公園）や経済界，政界などの著名人の別邸があり，外国大使が利用した旅館の存在や親水公園などの性格からも，ここが《保養・レクリエーションの地》であると性格づけることができる．

江戸時代には東海道が通じ，宿場町であると同時に沼津は城下町でもあった．狩野川舟運や江戸廻米が川湊を発達させるなど，〈交通の往来〉も活発であった．現代においても東海道新幹線，御殿場線，伊豆箱根鉄道，東名高速道路（沼津 IC），国道１号，136号，246号などの鉄道・道路をはじめ，沼津港と戸田港，土肥港を結ぶ航路などが通じて〈交通の結節点〉となっており，《交通の要地》としての性格が生まれた．それらが温泉，ゴルフ場，マリンスポーツ，イチゴ狩などの〈伊豆半島の多彩な観光資源〉と結びつき，《首都圏との結合》という位置づけから，ここを【伊豆観光の一拠点】として性格づけることができる．

⑷　都市機能の集積

沼津駅前には西武百貨店，富士急百貨店をはじめとして〈大型店舗が立地〉し，駅南には仲見世商店街などが，三島市には旧東海道宿を起源にもつ三島大通り商店街などの〈中心商業地区が形成〉されている．このような《中心商業地の集積》がみられるものの，近年中心部から撤退する大型店もあり，〈郊外型大型店の立地〉が進む一方で〈中心部の商業の空洞化〉が進みつつある．

郊外型大型店は，沼津市では石橋製糸場跡にイトーヨーカドーを核とするイシバシプラザが形成され，その前の通りが接触変質によりリコー通り商店街として成長した．さらに東京麻糸紡績工場跡地には西友が進出し，清水町では大東紡織が工場跡地に複合商業施設サントムーン柿田川を運営している．

また，愛鷹山麓で創業した銀行を起源とするスルガ銀行の本店をはじめ，都市銀行，地方銀行，証券会社の本支店が立地し，〈金融機関の集積〉という性格がみられ，あるいは検察庁，裁判所，静岡県東部総合庁舎などから，司法や行政の〈出先機関の集積〉という位置づけができる．こうして《都市機能の集積》という性格が示される．

⑸　都市化の進展

三島市から長泉町にかけて野戦重砲兵連隊が駐屯していた広大な土地は，東レなどの工場や大学，高校などの教育機関，JR 東海の研修・訓練機関，集合住宅に転用された．さらに，前述したように〈工場跡地は再開発〉され大型店に転用されたほか，集合住宅にも転用された．軍用跡地や工場跡地に限らず，箱根山や愛鷹山麓では宅地開発が進み，低地部では農地転用が行われ，工場や大型店舗に加えて〈宅地化と人口増加〉がもたらされ，〈沼津市と三島市は清水町・長泉町を含みながら連担〉し，一方で〈住商工の混在〉と〈混住化〉がみられるようになった．こうして《都市化の進展》が進むと同時に，《都市機能の集積》と相まって【静岡県東部の中心】という性格づけが示される．

このようにみてくると，沼津・三島地域は最終的に「富水性地域」であり，「伊豆観光の一拠点」であり，「静岡県東部の中心」という，３つの大きな性格に収斂されることになる．

Ⅳ　記述方法と地域構造図

前章で述べた内容は，概要を示したものに過ぎない．地誌として記述するためには，人口，工業，商業，あるいは農産物の生産高や観光客数といったさまざまな地理的事象の具体的なデータを示す必要があり，必要

に応じてそれらを図表化して説明しなければならない．自然条件については，個別に章節を設けるのではなく，例えば地下水の湧出地の地形や湧出量は，それぞれの湧水の記述のところで触れればよいし，火山斜面の農業に地形や土壌を，気候に関する諸データは暖地性の説明や農業，観光と関連づけて記述すればよい．

重要なことは，性格づけられた各項目をどのように記述していくかという点である．動的地誌の記述にあたっては，二つの方法が考えられる．一つは，上述の沼津・三島地域を例にとれば，最終的に提示された3つの大きな性格をまず示し，それを構成する中位の性格を説明し，次に中位の性格を成立させている下位の性格を説明し，最後にそれらがどのような地理的事象によって説明しうるかを述べていく方法である．他の一つは，これとは逆にどのような地理的事象があり，それによってどのような下位の性格が設定され，さらにそれらが集まってどのような中位の性格となり，それらがどのように上位の性格に繋がっていくかを説明する方法である．後者の方が記述しやすいし，理解されやすいと思われるが，インパクトがあるのは前者の記述方法であろう．前述のシュペートマンや田中啓爾も，前者の方法を強調している．どちらの方がよいかについては，今後の課題としたい．なお，下位の性格から上位の性格に至る過程は，ショレー（A. Cholley, 1967）のいう低次から高次に至る複合体の概念と相通じるものがあるのではないかと考えている．

一方，最上位に位置づけられた性格，上記の例でいえば3つの性格をどのような順位で記述するかという問題もある．富水性の地域という性格は，沼津・三島地域内という限定された地域での地理的事象によって構成されたものである，これに対して，静岡県東部の中心という性格は，県東部というやや広い範囲の中で性格づけられたものであり，さらに伊豆観光の一拠点という性格は，伊豆半島という地域に加え首都圏と結びついているという，より広範な範囲を含むことによって成立している．縮域的な方法をとれば伊豆観光の一拠点→静岡県東部の中心→富水性地域という順になるであろうし，広域的な方法をとればこの逆になる．前出の『東京都新誌』は，前者の方法をとっているとみてよい．どちらの方法がよいか，どちらの方法であるべきかは，他の課題とともに今後考えてみたい．

いずれにしても，このような方法で地誌を作成するとすれば，第2図に示したような全体像を示すことが効果的であり，また客観性を高めるうえでもこうした表現が必要であると考える．本稿ではこの図を地域構造とした．その可否について検討の余地はあるが，図示することによって地理的諸事象の有機的な結合関係が可視化され，地域構造が明瞭になり，それに基づいて記述すれば動的地誌になるのではないかと考えている．

V　おわりに

以上が動的地誌を具体的に，ある程度客観的にみることを可能にする表現方法と記述方法の試論である．具体的な地誌学的記述には至っていないが，その方向性は示し得たと考える．

ただし，第2図についても事象の取り上げ方やその括り方，表示方法など不十分なところも多い．1人より2人，2人より3人の研究者が納得できる表現でなければならず，それに基づいた記述でなければならない．また，このような方法で記述した場合，静的地誌がもつ同一指標で他地域と比較できる利点，過去とも比較しやすいという利点は得られないことになる．そのマイナス部分をどう克服するかも課題として残る．

分析する系統地理学と総合する地誌学は車の両輪であり，地誌学研究が低調であるというのは地理学にとって好ましいことではない．地誌学のあり方が，具体的な事例研究を通して活発化することが望まれる．

第２図　沼津・三島地域の地域構造
（著者原図）

REGIONAL STUDIES Vol.50 No. 2 pp. 1～8
2010－3 ISSN 0389-6641

参考文献

アンドレ・ショレー著，山本正三・正井泰夫・田中真吾共訳（1967）：『地理学の方法論的考察』大明堂，170p.
小川一朗（2003）：『川崎の地誌』有隣堂，167p.
木内信蔵・西川　治編（1967）：『地理学総論』朝倉地理学講座第1巻，朝倉書店，229p.
竹内祐一（2009）：地理教育の本質論的考察，人文地理，61-1，79-85.
田中啓爾（1949）：『東京都新誌』日本書院，210p.
谷岡武雄・斎藤　毅（1984）：対談“新しい地誌をつくる”，地理，29-3，11-22.
田村百代（1984）：『田中啓爾と日本近代地誌学』古今書院，180p.
日本地誌研究所（1967他）：『日本地誌』1～21巻．二宮書店.
日本地誌研究所（1989）：『地理学辞典　改訂版』二宮書店，808p.
長谷川典夫（1994）：『地誌学研究－地誌作成法とその実例－』大明堂，184p.
立正大学地理学教室（2007）：『日本の地誌』古今書院，261p.

Area Study of the Numazu-Mishima Region
- An Essay about Dynamic Regional Geography -

Masatoshi OHTSUKA*

This paper will attempt to explain dynamic regional geography using the Numazu-Mishima region in Shizuoka prefecture as a case study. Dynamic regional geography differs from traditional static regional geography, which uses standardized descriptions of geology, topography, climate, history, population, agriculture, industry, communications and culture, etc., in that it describes the elements of the present geographical characteristics in the region in order from the highest dimension to the lowest dimension.

The dynamic regional geography of the Numazu-Mishima region can be described according to the regional structure shown in Figure 2. In the Numazu-Mishima region can be found the three important geographical elements: an area of large water resources, an entrance to tourism and a nodal region.

Near the large water resources are located water oriented industries such as the spinning of hemp thread, the production of chemical fibers (by the Toray Co.) and the production of dairy products (by the Morinaga Co.) and so on. Characters of its position as an entrance to tourism in central and western Izu Peninsula are its traffic facilities, various tourism resources and its tourist attractions such as hot spring resorts, picnic areas, strawberry and orange picking, golf courses, fishing and marine sports, etc. Its position as a nodal region in the eastern part of Shizuoka prefecture is established by the concentration of various urban functions.

［keywords］1 Dynamic regional geography　2 Regional structure　3 Numazu-Mishima region

*Faculty of Geo-environmental Science, Rissho University